会員の広場
Member's Open Space

川柳で綴る遊里史（その3）

●美唄歯科医師会会員
雨田　実

先号，先々号で，遊里に働く人達について述べたが，今回は客について述べたい。大名，旗本，高禄武士とか，紀文，奈良茂はじめ札差などの一部の富豪をもてなす大まがきの，ひとにぎりの大店は別として，すっかり大衆化して格子の間から，内部に並んでいる遊女を物色するという張見世中心になると，繰り込んでくる客の風俗も変わった。買物もしないで見物だけして歩く客が店頭をにぎわせたという。暮六つ（午後6時）開店と同時に客が集中した。これを，ぞめくといい，ぞめき客，素見物，ひやかし，などの通語を生じた。

地廻りのこと

ひやかしに似た連中のことで，吉原近辺の遊び人や職人のうち毎晩の如く廓の中をひやかして歩く常連だった。**素見物かわばあいっと指をさし貴様どれ俺はあれだと素見いひ　素見が七分買うが三分なり**　これは現在のデパートにもあてはまるという。**西瓜ふた切れで吉原見てかえり**　立ち売りの西瓜を食べながらの見物。**無し共が十丁町を見て歩き**の如く，ふところが淋しいくせに五丁町を二度合計十丁見て歩いたり，しかも，**ひやかしのくせに念には念を入れ**と，おめかしをして出かけるのだから可愛い。**つらいこと素見にばかりほれられる**　の如き遊女はありがた迷惑であったろう。**おかしさは素見の女房りん気なり**　ひやかしでも吉原へ行って来たというだけで焼くからおかしい。**素見物昼寝している馬鹿らしさ**　の句の如く，ひやかして歩き廻ったあげく疲れて翌日昼寝しているとは，それでもひやかしは止められなかったらしく，枯れ木も山の何とやらで，ひやかしと地廻りの連中は吉原のかげのひき立て役でもあった。

高禄武士（武士階級の中でも，御留守居役など）のこと

吉原へ来て御留守居は智恵じまん　の句の如く諸大名の江戸上屋敷にいて幕府との公務の連絡，他藩の留守居役との情報交換の任に当たる高級武士で藩の交際費を使用出来たので，遊興の機会も多く藩の重要かくべからざる外交官であったので，**遊女の文を留守居は明るく見**　の句のように公務で遊里にいくという大義名分があったので，遊里からの文を公然と開けるのだった。忠臣蔵の浅野の江戸屋敷の御留守居役達は，外交官としての智恵じまんがいなかったらしい。

下級武士（浅黄うら）のこと

遊女には御縁がつたなき浅黄うら　の句の如く参勤交代で江戸に来ている下級武士は，よごれが目立たないようにうすいあい色の着物のうらを付けていたので，これを勤番武士の代名詞として浅黄うらと呼んだ。当時幕府に対する非難は絶対ゆるされなかったが，大名や勤番武士を諷刺したりには寛大だったので，武士全体への反感を浅黄うらにぶっつけたものだから，単身赴任の浅黄うら

こそ気の毒そのものだった。**人は武士なぜ遊女にはいやがられ　嫌われるくせに遊女を浅黄すき持てぬやつかんらからからと打笑い**　などの句がある。浅黄うらこそいいつらの皮だった。

若旦那のこと

惜しいこと　あたら息子律義也　とむらいから病み付き息子通い　そろそろと息子碁にあきマリにあき　の句の如くまじめな息子も葬式がえりの精進落としに誘われてからとか，いろいろの趣味にあきた結果とか，動機は違っても吉原に熱中するとやめられない。**俳諧の会に行くと息子は家を出る　謡本親父を化す道具也**　など色々口実をつけても，ごまかしの演技が下手なために父親に怪しまれ，外出禁止令が出たりする。こんな小ばなしが。

久しぶりの若旦那のお出ましに，なじみの遊女喜びて。この頃久しうおいでなりんせん，お心変わりなんしたか，といふ。いいや心変わりではないが，さんざん痔が起こって，とのこたえに，それはおこまりなさんしたでござんしょ。殊に痔にはいろいろありんすが若旦那のは，に俺のは親父だ。

これでは来られなかった筈だ。

類が友をとやらで悪友が誘いに来る。**あれと出るなと両方の親がいい**　の句の如く。悪い友達がいて困ると言い合うのも，永遠に変わらぬ親バカ心理であろう。**さりながら打つには増しと甘い母とか。ちっとづつ母手伝ってドラにする**　の句のようにバクチより吉原のほうがましと弁護するので息子は手の付けられない放蕩息子になっていく。

居続のこと

遊里でひと夜をすごし朝になっても帰らずに遊び続けることで，十返舎一九や山東京伝ともに居続の常連だったという。一夜をすごした遊女との朝の別れを（後朝の別れ）といい，**きぬぎぬの香をなつかしみ居続ける**　の句の如くなり。遊女も**居続けの髪をべっ甲で撫ぜつける　居続けの屏風の外に迎い酒**　の句のような用意までしてくれるのだからたまらない。その上に空模様まで**居なんしの味方に雪も降りいだし**　と居続けをすすめる遊女に味方するになっては無条件降伏となって居続ける。が華やかに見える遊里裏面をかいま見ることもある。**居続けに顔（遊女の）よりひどいアラが見え**　の句の如く，朝の光のなかで見る化粧くずれした，お茶をひいた（お客のなかった）遊女の疲れ切った，あわれな姿を見せられて，はっとしたりする場面もある。うちは少し脈があるが，**よくよくのバカ吉原に三日居る**　となっては親父もだまってはいられない。**勘当は雨か雪かのあげくなり　江戸に居やよと母未練なり**　母親の涙のうちに家に居られなくなる若旦那も多かった。

老人客（大店のごいんきょ。金持ちの老人）のこと

新造の客は逆さでおない年　の句のように禿あがりの新造は17で客は70の老人というように老人客の相手は新造だった。若い女性を相手にすることで若返りをはかる老人の悲願と，一人前の遊女になるさいに金を出してもらおうとの店と新造の打算とが生んだ悲喜劇な図であった。**提灯を下げて宝の山に入り**　しわだらけの老人の持ち物のことで，**うなぎの油提灯が良くとぼり　提灯の骨つぎをする生卵**　スタミナ源の補給に余念がなかった。現代ならローヤルゼリーとかまた？でスタミナ源を補給しての出陣となり。**美しい手で提灯のシワのばし**　というサービスを受けもするが，**新造は小便ごとの杖の役**　の有様だから，**新造は入歯はずして見なといふ**　ような色気には縁遠い光景も展開される。**新造は死にはぐれめとそっと言い**　となって人生の旅路の果ての悲哀は深いものがあったようだ。次回は遊女の恋，女房持の客，客に対する遊女達の私刑などについて述べたい。